

「人間」の基本構造：「理性」を中心に

上田, 富美子
九州大学医療技術短期大学部診療放射線技術学科

<https://doi.org/10.15017/182>

出版情報：九州大学医療技術短期大学部紀要. 15, pp.61-69, 1988-03-28. 九州大学医療技術短期大学部
バージョン：
権利関係：



「人間」の基本構造

——「理性」を中心に——

上 田 富美子*

La structure fondamentale de l'être humain selon la raison

Fumiko Ueda

ある日、一匹の猿は立ちあがった。そうしてもう二度と再び四つん這いになることはなかった。こうして「人類」は誕生した。しかし何がそうさせたのか、それは全く不明である。なぜなら、すべての理由は事が起きてしまったあとで用意されたものにすぎないであろうから。後追いはたとえいくら綿密に見えようとも、始元を適確に指し示すことはできはずまい。私たちはともかくも「人類」として誕生してしまった。それから後のことは私たちのものであると言えるかもしれない。だが私たちに誕生をもたらしたあのものは、その力は、私たちを超えたところにある。まずは「不明」があった。

しかしそれは私たちにとって最も堪えがたいところでもある。なぜなら「人類」は、その「人類」たるのしるしである「理性」でもって、不明性を許容することに屈辱をおぼえざるをえないからである。それゆえにダーウィンの出現はある必然性を伴っていたと言えよう。なぜならその説は、人類の誕生とその後の歴史的展開という明確な結果の上に立ち、そこからの遡源によって然るべき理由を組み立てたものと見なしうるのであるから。それは「理性」の好むところとまさに一致し、長期にわたるその根強い支持の原因となってきたに違いない。ダーウィンは後追い説の頂点を極め、「理性」

が想定しうる最も望ましいかたちの始元構築をおこなったと言いうことができるであろう。

自画自讃—これこそ「理性」の、人間に本来的在り方の、然らしめるところではなかろうか。私たちはこのものよりほかの規準をもたない。自らを自らによって量るということは、自身の絶対的肯定であり、自己への疑念は前以て封じ込められてしまっている。だがこれは言うなれば、規準がないということにほかならないのではあるまいか。私たちは自らに対し、真の意味での自己規制を設けることができない。私たちがどこに行くのか、誰も知ってはいない。自己だけを唯一の恃みとし、果て知らぬ自己拡充へといそしみ続けることが「人間」として生まれたものの宿命でもあるのだろうか。

だがいま、その結果自身が私たちに鋭い問いを投げかけようとしている。「自然」は絶えざる改変にさらされ、自らの中の「自然」すなわち「生命」の根にさえその手は及ぼうとしている。それは単なる想念の中での出来事ではなく、「事実」の積み重ねであってみれば緊急の対応を迫られていると言って差し支えないであろう。かつて私たちをあれほどまでに誘わない夢中にさせた「進歩」の旗じるしもいまはやや色あせ、そのはためきも心なしか力弱いものに目に映ってくる。長い時間の歩みの果てに、私たちはようやく真に自己とは何かを問いただすべき地点にきているのかもしれない。しかしそのために

*九州大学医療技術短期大学部一般教育

は、「人間」にとってあれほどまでに身になじみ心地よかった自己肯定の衣を引き剥がさなければなるまい。その時こそ私たちははじめて、幻想なしの「真実」と向き合うことになるでもあろう。しかしそれがどんなに困難なことであるか、いく度くり返してもくり返し過ぎることにはないに違いない。

だがまずもって用意されるべきは絶対の「王道」に対する、「相対化」のささやかな試みであり、単眼でなく「複眼的」なものの方でもあろう。そのためには、しかしながら私たちはやはり自らの誕生の時点に再び身を置き、そこに新たな視点を当てることから始めなければなるまい。

1

すなわちある日突然、一匹の猿は立ちあがった。その理由を結果から類推するのは止そう。なぜならさきに述べたように、そうすることこそが私たちを自己中心的な誤謬に陥らせた当のものであるに違いないのだから。ただ一つ言えることは、私たちの側からは、そこにどんな理由も設定できえないだろうということである。⁽¹⁾

とにかくいまはこの「事実」だけが重要であろう。だからこのことのみを直視しよう。一匹の猿は立ちあがり二つの足で歩きはじめた。そして彼は以後、四本足で地面を匍匐することはなかった。その瞬間、「人類」は生れた。この地上の奇種は、他のどこにこのような奇妙な形態を取るものがあつたらう。それは随分と無理な姿勢に違いない。そこにはどんな理由が設けられていたというのであろうか。

「人間」の特質はしかし、すべてこの一点に集約しているように見える。地を這っている分には均等にその身体にかけられていたかのごとき重力の配分に、ここでにわかには不均衡が生じる。水平から垂直への体位の変換である。これはほとんど革命的ともいえる事柄であつたに違いない。この時から「世界」は一変する。「人間」においてのみ、「天」と「地」の二方向性が与えられた。人の身体は「天」と「地」をつ

なく架け橋のようにも、二つの方向性に引き裂かれたもののようにも見える。それはすでに「人間」というものについて本質的な何かを暗示してはいまいか。

何よりここで注目しなくてはならないのは、「足」から独立した「手」の誕生をはじめて見たということであろう。したがって「人間」について考察する上で、「手」は最も重要な器官である。「直立歩行」という言葉に眩惑されて、その影に潜む真に本質的な事柄が見落されてはなるまい。問題は重力によって地の中心へと繋がれた、他の動物たちと共通する足ではなく、全く新しい独自の在り方を示す「手」であろう。「手」は「足」から独り立ちし、「自由」となった。「人間」に必然的に付随する「自主独立」、「自由」などの概念の由来は、すでにこのかたちの中に潜んではいないだろうか。

ところで直立した「人間」にとって「手」よりもさらに地を離れたところにあり、その意味で重力の支配から最も遠くに位置づけられるのは、言うまでもなく「頭」であろう。頭上に広がるのは無限の蒼穹であり、そこには束縛のかけらも見出せない。してみるとさきには「手」に帰属すると見なされた「自由」は本来、「頭」にこそ委ねられるべきではなかったのか。そこには目くるめく無限の「自由」の座が設けられているように見える。

「手」は直立した人のかたちの中で、「頭」よりは下方に位置している。しかし首を隔てて、非常に接近した位置関係にあることもまたたしかである。こうした「手」の在り方はまことに微妙であろう。それはこれら両者が、「自由」という点からもそう見えたように、ほとんど一体のものとして捉えられなければならないことを意味している。⁽²⁾

かくしてともかく「人間」は相対峙する二つのもの、すなわち「天」と「地」のはざまにあって、その対立を文字通り一身になわされる次第とはなつた。二つの相反する力が、方向性が私たちを引き裂く。⁽³⁾一方は天上高く舞いあがり、他方は地中深くに引き込もうとする。体型

自身からして「人間」は矛盾的存在であり、それはその「生」の困難さをすでにして暗示している。

しかしながら人間が「人間」である限りの領野では、これら両方向性のうちいずれにつくべきかは明確である。なぜなら人の人たる所以は、動物と共通する「地」への方向すなわち「足」の側に見出せるのではなく、そこから自由な「頭」と「手」の側、すなわち「天」への方向性にのみ帰属するであろうから。これら二つの方向性は相対峙することにより、互いに分離している。そして両者のつながりが断たれていることが、さいわいにも人間に自分自身の矛盾を意識させないですむ仕組になっている。この対立したものを抱えながら、他方そのことを考慮しないですむという特有な在り方が、よくも悪くも「人間」の独自性をしるしづけることになるであろう。天空を仰ぎ見ながら足元の穴ぼこに落ち込むのは、何も古代の学者の占有するところではあるまい。

ところでこのような「人間」の在り方は、アリストテレスによって「理性的」と規定されたものにも相当するのではないだろうか。⁽⁴⁾なぜならそれは「人間は理性的動物である」という意味の言明の一部であり、そこには「理性」と「動物」という相対立する二つの概念が結合して「人間」というものを定義し、これがまさにそれぞれ上に見た上方志向と下方志向に適合するとともに、人間固有の特性としては前者への全面的承認がうかがえるように見えるからである。したがって以下筆者も、この人間特有の在り方の核心を指し示す語として「理性」という言葉を用いることにしたい。もっともこのものは、人間の単純でない在り方そのままに多くの論議にさらされ、その像はぶれ、定まったかたちを結ぼうとはしない。それゆえに論究に際し、さきに述べた基本的図式へと絶えず立ち戻る努力が必要とされるであろう。さもないと像は分散し崩れ、たちまちのうちに手元から迂り去ってゆくに相違ないであろうから。

私たちがいかに本性的に上方志向的であるか、

その例は枚挙にいとまがない。「神」を頂点とするあらゆるよきものの座は上方に設けられ、それは類比的、象徴的な意味においても私たちの生活のすみずみを覆い尽して、すべての「価値」の源となっている。それに対し、下方はつねに忌避の対象であり、人間にとって不都合で無価値なものはそこへと押し込められる。「生」の衰退の果ての「死」は実際「地」や「地下」と結びつくのに対し、「生命」の横溢は人のまなざしを上方へと、「天空」の方へと向わせ、その胸を喜びと自信とで充たす。打ちひしがれば人は必然的に俯き、肩を落し、背をかがめ、その眼を地上へと向ける。それがいかに自らの本性に反し、不本意なことであるか、人は体験によって十二分に知らされている。そして「天」の「光」は「善」の、「地」に潜む「闇」は「悪」の象徴と見なされもする。

2

要するに私たちにとって「理性」は絶対であり、基点であり拠りどころである。「人間」であることのしるしがそこにある以上、それは余りに当然のことと言えるでもあろうが。しかし一方、私たちはともかくも生きなければならない。いかに上方に憧れようとも、私たちの生きる糧は地上にしか求められない。私たちの下半身が、究極的なかたちでは「足」が、他のすべてのものと等しなみに、私たちが地上の生きものであることを否応なく証明している。私たちの目は地上へと向けられざるをえない。たといいやいやであったにしても、いやいやということは、私たちが第一義的に「理性」のものであり、その上に立って地上を見るときでもある。したがって、それは決して自然的な行為ではない。私たちにとって好ましくはないが、そうせざるをえず、そうしなければならないということを意味している。それは一つの「義務」のかたちであり、ここに「意志」が生れ出る土壌が見出せよう。

「意志」はしたがって、「理性」を自らの本性とする私たちが、それに反する方向にかかわ

ってゆかざるをえない時に出現するかたちであると言ふことができる。それゆえそれは一見上方と下方を結ぶ媒介的役割をになうもののようにも思えるが、実は決して下方の側に立つことはありえない。なぜなら「理性」の第一義性はあくまで保留されているのだから、「意志」に唯一可能なことは、「理性」のかたちを地上に印すことでしかありえないからだ。「意志」はその意味で「理性」の尖兵であるとも言えよう。いやむしろ正確には「理性」が下方とかかわらざるをえない時、そのようなかたちを取って出現する「理性」の一形態であると言ふ方が適切かも知れない。「理性」と「意志」とは一体のものであり、人間が生きる次元において、これら両者を分離することはほとんど不可能である。

したがって「意志」は言うまでもなく極めて人間的なものであり、それが含む反自然性およびある困難とその克服のイメージは、端的に「人間」の「生」の特殊な在り方を指し示している。「人間」が生きることは最早自然なことではありえず、特有の「身すぎ」「世すぎ」の労苦がかけられることでもある。人として生きるのは、たしかに容易なことではない。

ともかく私たちはまずは一方的能動者として「大地」に働きかけ、生きるための資を得ようとする。それは裏を返せば、私たちにとって「大地」は沈黙の素材であり、その働きかけをまっけてはじめて「意味」をもち「価値」を与えられるということでもある。それはまさに「生産」としか呼びようのない行為であろう。こうして「不毛の大地」が「沃野」となった景観が、私たちの眼前に展開する。

そしてこの大転換に重要な役割を果すのがほかならぬ「手」であることは言うまでもない。

「手」はまさに私たちの「意志」の具体的代行者であり、それはすなわち「理性」のそれでもあるということの意味する。ここにこれら三者の密接不可分な関係が示唆されるが、ここで当然浮上してくるのが「道具性」という問題であろう。あらゆる「道具」の原型は「手」にあり、「手」は最初の「道具」であるとも言えるであ

ろうが、そのことは取りも直さず、「意志」や「理性」としてその性格を免れるものではないことを示している。すなわちそれは私たちが下方すなわち「大地」とは逆方向性を一たん取りながら、再びそこへと立ち帰らなければならないという基本的な一点にかかわるわけであり、こうした「人間」の間接的在り方自身が必然的にその道具的なそれを導き出すということでもある。「道具」は決して「人間」にとって付帯的な「付け足し」などではありえない。それはすでに私たちの「本質」の奥深くへと喰い込んだ事柄である。⁽⁵⁾

そして「道具」がそうであるならば、「言葉」として同様であろう。それは同じ一つの「根源」に根ざしているのであり、かたちこそ異なれ、「人間」と「自然」との間に存在する償いようのない隙間に芽生えた同根の花である。いやもっと適切には、等しく根を断たれたところに生う無根の縁者であると言おうか。

3

そしてまた当然のことながら、私たちの「大地」ないし「自然」へのかかわりは、上から下へのそれである。私たちの身体の在り方自体がその範型であるように。「頭」は「手」とともに、言い換えるなら「理性」は「足」やその下に横たわる「大地」の委細かまわず、自らの様式をそこへと一方的に押しつける。こうして風景は一変するであろう。それは人類誕生まで誰も見ることのなかった反自然的な文字通り人工的なそれである。この「自然」から明確に区別された一線を、たとえそれがどんなにか細いものであろうとも考古学者は決して見誤ることはないに違いない。なぜならそれは「異質」という際立った特徴をどこか潜み隠しているからである。それほかならぬ「文化」のかたちと言ふことができるであろう。最早単なる「動物」ではない私たちは完全に「自然」の一部として生きることは不可能である。文化的営為こそが、私たちが生きる証しである。

そしてこの行為には無論のこと限界がない。

私たちが頭上に戴く「天空」のごとくに。またこの上から下への方向性は、意志的側面から見るととくに顕著なように「支配」と「征服」のイメージを伴う。したがって絶えざる「支配」と「征服」もまた極めて人間的な事柄である。それは当然対「自然」への関係においてばかりでなく、「人間」対「人間」のそれにおいても例外ではない。なぜならそれは「人間」にとって本質的なものであるから、どんな局面においても現れないわけにはいかないからである。

ところでそれは同時にまた、無限の「進歩」、「発展」、「向上」のイメージをも形づくるであろう。それは「人間」にとって最も好ましいものに違いない。しかしその時、人はそれが「支配」や「征服」と同根のものとはよもや思いそめはしないであろう。

このように見る限り、私たちにとっては「行為」そのものが問題なのだということがわかってくる。「対象」は何であれ、それを克服しつつ「無限」に向って突っ走る。そこにこそかけがえのない人間的喜びもあるというわけだ。だとすればあらゆる「文化」の痕跡はすでに見捨てられたか、やがて見捨てらるべきものであり、人間的行為の「廃棄物」にすぎないという見方も可能になってくる。そしてそこには当然のことに「対象」への配慮が成立する基盤は見出せない。したがって「人間」はどこまでも自己中心的な存在であると言うことができる。それはすでに述べた上方志向的な在り方から、おのずと帰結することでもあるのだが。すなわちここでは、下方への道はすでに絶たれてしまっており、それゆえに「自然」をはじめ他の「対象」自体を顧慮する構造を「人間」はもともと持ち合わせてはいないのであるから。

ところでさきに人は生きるために下方へと、「大地」へとかわらざるをえないと言ったが、上のような在り方が「人間」に本来的であるとすれば、こうした見解には大きな疑念がつきまとうことになるろう。「人間」の「自然」へのかわりかは、とくに「必要」の枠を超え出ている。「生命保持」の「限界」がどのあたりにあ

るかを私たちは決して知らない。人はつねに埒を超える。それは自身の特異な構造が示すところでもある。そしてこのことは「人間」に何か「不真面目」な印象を与えることにもなるろう。「遊び」が「人間」に必然的である理由も多分そこに見出せる。

そしてこのかたちは、いわゆる私たちの「下半身」にも影響を与えないわけにはいかないだろう。私たちはこの下へと向かう方向性を「本能」という名で一括し、当然のことにこれを無視し軽蔑する。なぜならそれは、「理性」中心の「人間」の在り方に反するものなのであるから。私たちはできればそれをなしで済ませたいところでもあったろう。だがそれもまた実際に私たちを構成しており、現実存在している以上そうするわけにもいかない。ここに一つの厄介な問題が生じる。

しかしながら一つだけ明確なことは、そこでも上から下へというあの構図だけには変ることではないということである。なぜならそれこそが人間固有のものなのであるから。こうしていわゆる「本能」も「人間」にあっては「無限」の影を宿す。そして他の動物たちには見られない独自のものとなり、「欲望」の名を以て呼ばれることになるろう。そこには無論限界がない。

こうして人間的なものに転化した「欲望」は当然「理性」や「意志」になじみやすいかたちとなり、これら三者の境界は極めて曖昧なものとなる。そして「欲望」の起爆的な力は、私たちを一そう「無限」へと駆り立てる「翼」ともなりうるであろう。だが本来それは「翼」のように軽やかなものではないはずなのだが。またこれら三者の間におのずから生じる混同や混乱は、私たちをして「欲望」を「理性」と見誤らせることになるであろう。いやそればかりか「意志」の力を借りて、むしろ意図的にそのような操作を行うことさえありえないことではない。ここに人間特有の「罪」や「不正」の土壌がある。

しかしここまできて私たちは、自らが頭上に戴いたあの「無限」が逆転したのに気づくこと

になるのではなからうか。「無限」は下方へとじよじよに浸透し、透明な「蒼穹」は知らぬ間に地下の果てしない暗闇の中へと呑み込まれてしまっている。

4

こうして私たちは「無限」の逆転の際に立ち、どこまでも開かれた可能性と「自由」を我がものとし、限りない進歩・発展に夢を托してきた私たちの在りようは本当は自らのものではなく、反って征服の対象とされた「自然」の側にこそ属していたのではないかという疑念にさらされることになる。つまり「自然」というものが私たちに永遠に不明であるからこそ、私たちは営々たる果てのない努力を重ねてきたのではなかったか。それは人が上方を志向し「自然」とは逆の方向を目指したところから、おのずと帰結することでもあったろう。人は相手構わず自らの在り方を押しつけるよりほかの手だてをもちえなかった。それは自己中心的であると同時に極めて「自閉的」な在り方でもあると言うことができるであろう。私たちにこの自らを囲い込んだ囲いを永久に突破することは許されない。どこまで行っても、そこには「人間」のしるしがつけられてゆくだけのことである。こうして「疎外」もまた私たち特有の形態となる。⁽⁶⁾

私たちは自らの「自由意志」で「自然」を支配し統御していると思いついでいるかもしれない。しかし上のように見る限り、限りない「挑戦」のエネルギーをむしろ「自然」に負っているとも言えるのではないか。「自然」は私たちの前にどこまでも沈黙し、立ちはだかる。そのことが私たちを強くその方へと駆り立てずにはおかないのではないのか。だが私たちはそのことを自覚するところまでにはなかなか至らない。私たちの本性は、表の在り方はそのようにできてはいないのであるから。それはむしろ「理性」の裏返しとして、暗い「情動」となって私たちを突き動かすことにもなる。私たちの「自然支配」の中には残酷な報復の感情が隠されていないとは言い切れない。私たちはどこかで、「自

然」の不明性に絶えず焦ら立ち続けているに違いないのであるから。

ここに「人間」の極めて矛盾的な在り方が際立てられてくる。それはつとに「人間」の体型自身が証明するところでもあったのであるが。しかしながらすでに何度も繰り返した述べてように、私たちの構造はそのことに容易に気づかぬようにできている。いやそこにはつねに「意志」の加担があるのだから、正確には気づこうとしていないと言う方がむしろ適切であるのかもしれない。これは突き崩すにはなかなか鞏固な壁と言わねばなるまい。というのはこの「人間」の特異な在り方は、はじめは「何もの」かによってたしかに与えられたものであったにせよ、その真の特異性は、自らそれを守り育てる装置をもちかね備えていた点に見出せるだろうからである。人は人であるのではなく、人であろうとし、人として自らをつくりあげてゆくものである。それはすでに「方向性」と呼ばれたものの中に含まれている事柄でもあったに違いない。

しかしながら進歩・発展の夢は決して中空に描かれるわけではない。それは「文化」である限り、確実に「自然」の改変を伴っている。しかも絶えざる改変を。したがって私たちの思いはいずこにあれ、「現実」が私たちに何らかの対応を迫りつつあることもまたたしかである。なぜなら「自然」の側に立てば「改変」は「破壊」にほかならないからであり、「自然」の「消滅」への方向性は、ただちに「生物」としての「人間」の「生命」の根の喪失につながるであろうからである。そしていま私たちは「科学・技術」という、かつての人々の思いもよらない超速の翼に乗り、しかもかなり長い旅を経てきているとなればなおさらのことであろう。皮肉にも「科学」という「理性」の最も先端的な現われが、逆の側面をいよいよあらわに開示しようとしてきている。

5

いま「科学」を「理性」の先端的現われと言ったが、それはガリレイの「自然という書物は

数学の言葉で書かれている⁽⁷⁾という見解の最もよく示すところであろう。ここにはたしかに私たちがすでに述べてきたことの凝縮したかたちが見出せる。「数学」は「理性」の究極的な形態であり、それが一方的に「自然」に適合されるところに「自然科学」は成立する。してみると「科学」はいずれ、遅かれ早かれ「人間」のもとにもたらされるはずのものであったと行うことできるであろう。なぜならそれは私たちが「人類」として誕生した時点において、すでに装置されていた事柄なのであるから。勿論、ある程度の時は必要ではあったに違いない。「理性」のかたちがくっきりとくまなく提示されるための。そして「科学」にはつねに「技術」が付随する。両者はほとんど一体のものに見なされていると言っている。しかも「技術」と言う時、「手」を抜きにしては考えることはおそらく不可能である。「理性」と「手」との密接不可分な関係が、ここまできて実に鮮明に映し出されてくる。それは「理性」の明確なかたちの出現の当然の結果であったに相違ないのだが、私たちはそこに、良くも悪くも「理性」の図式的形態を見出すことになるであろう。

さて「科学」においては「理性」への絶対的信頼が何よりもまず際立てられるが、ある人はそれを「信仰」になぞらえている⁽⁸⁾。たしかに現在私たちが第一義的に支配しているのは、このものであるに違いない。たとえ別に「信仰」をもっていたとしても、「科学」への信頼は決して崩れ去ることはあるまい。第二にこれと関連して、「科学」においては、その「対象」自体に顧慮が払われることは決してありえないということがある。「対象」は何であれ「理性」が己れの原理を貫くことこそが肝要で、「対象」は十重、二十重に「理性」でアマルガムされもとのかたちを見定めがたい。

そしていまや「理性」をモデルにした機械類の出現を見るに至ったことは、何よりもすべてを象徴する事柄であろう。無論、今日人々はサイエンス・フィクションをあるいは推理小説をとり分けて好み、コンピューター・ゲームに我

を忘れる。自動車で高速道路を突っ走り、家事も急速にオートメ化され自動化されつつある。未来はそれらのさらなる進展の上にしか築かれはすまい。「人間」のかたちはいよいよむき出しにされ、そしてそれは結局同じことだが、私たちはますます深くそこへと取り込まれ依存してゆくことになる。

したがって「科学・技術」の発展がいかに「自然破壊」を招こうとも、それは「理性」の与り知るところではない。なぜなら「理性」はもともと「自然」の側にはいないのだから、それこそがまさに「理性」というものの在り方なのだから、その責めを負うこともないしまたそうする必要もない。それはただひたすらに自らの道を歩むだけだ。すべては現在の事実が如実に示してくれているように。「理性」の進展とはしたがって、ただその「対象」から遠ざかることを意味している。「自然科学」もだから同様に、まことに逆説的だが「自然」からいよいよ離れ去るを目指している。

だから私たちの「理性」への思い入れがいかに深かろうとも、そこに自然救済を托することは間違いであろう。「科学」には「自然」の消失を食い止める力は委ねられてはいない。いやそればかりか、できることといえばその傾向に一そうの拍車をかけることだけにすぎないであろう。こう言っている間もたしかに「破壊」は進行している。それに対する何らかの根本的措置は火急のことである。しかしながら他方厄介にも、私たちの「理性」は上に述べたように、いよいよ深くそのことについて惰眠を貪ろうとしている。私たちは「科学」という尖鋭的な「理性」の道のりを遠く歩んできたぶん、一そう「自然」に対して鈍感になってきてきえている。ではこの亀裂は一たい何によって償えばいいのだろうか。私たちがそこに明確な「人間」のしるしを見たあのものが、全く何の役にも立たないというこの時に。

しかし私たちはすでに気づいていたのではなかったか。「理性」の「無限」の「前進」は裏を返せば、その「対象」が結局「理性」にとっ

て「不明」であるところに起因するのではないかと。そしてその自己中心的な「閉鎖性」とそこからくる「疎外」とを。またそれが巧妙に他のものとする代えられ、その上でなお自らを「理性」と名づける「欺瞞」などを。そしてさらにこれらすべてがああ「人間」の特異性に、すなわち上・下二方向性への分裂と上方への全面的固執という在り方に由来するのではないかということ。

ところでこの力は当然のことに「理性」を超える。なぜならそれはすでに「理性」を相対化しているのであるから。「理性」はそこではネガティブなかたちで捉えられ、より大きな枠組の中に移し変えられている。したがってまた「分裂」を「分裂」として把握するこの視点自体はトータルなもので、そこには「分裂」はおのずからありえない。私たちの中にそのような「能力」があるのはたしかなことである。しかしながらいよいよ強く私たちに被覆し、あらゆる手だてを尽くして雄弁に語りかける「理性」の前にその声は余りにもか細くまた静かである。真に力あるものがつねにそうであるように。そしてその声は当然聞き慣れた「理性」のそれとは大いに異っていてもいるであろう。だが「理性」の力が強ければ強いほど、その声もまたより明晰に聞き取られるに違いない。なぜなら「分裂」を超えそれを償うこのものは、「理性」がいよいよもって鋭く引き裂いてゆく切先の尖端の痛みを、何よりも強く一つの「危機」として感受しているに相違ないからである。

したがっていま私たちは、他のどの時代の者たちよりも、一そうその方へと耳を藉すべき時にきているのではないだろうか。トータルな「人間」として生きるために。「生」の充実とたしかかな手応えを得るために。そして何よりも「真実」のもとにこそ自らを繋ぎとめるために。それはつぎの重要な課題となるであろう。しかしながら、それが容易でないことは言うまでもない。なぜなら私たちに本来的な「理性」は変幻自在なその本性で以て、このものをいく重にも隠蔽し、その試みの遂行を阻み続けるに違

ないだろうからである。

「人間」の分裂した在り方と、根を断たれた一方の側に生い繁る仇花的な「理性」を思う時、やはり「人間」は偏頗で特異な生きものであると考えざるをえない。それは決して生き易い存在ではなく、他のものたち以上に「生存」のために多くの労苦をかけられることになる。いやさらに言えば、多大の「無理」を強いられると言った方がむしろ適切かもしれない。しかも「人間」においては単なる「生存」ということは成立せず、それはとつとつにその枠をはみ出しているのであるから、一そうのことである。「埒を超えるもの」それが「人類」として生れ出たものの負うべき「宿命」でもあろうか。

そして「分裂」ないし「亀裂」の中から、ありとあらゆる「虚妄」や「幻想」や「不正」や「罪」は噴きこぼれる。それらはすべて人間的なものであり、その目まぐるしい変貌は容易にその正体をあかさそうとははくれない。私たちは「夢」と格闘し疲れ、そしてその「生」を閉じる。「人間」とは何か、「世界」とは何か—私たちに把握しがたい。その像はぶれ歪み、つねに惑わしに満ちている。

こうした「人間」の在り方は、たしかにそのままの「ミッシング・リンク」⁽⁹⁾を思わせるものがある。一続きであるべきものが断たれ、両極へと分離したかたちがそこにはたしかにある。それは「不自然」そのものであり、「人間」を「自然」の中の「異端児」たらしめるに十分であろう。そしてそれはまた、あの理由なき中立的「突然変異」と非常によく重なり合うものをもっている。私たちの「種」を決定づけるこの要因を、したがって私たちの「優秀性」の根拠と見るのは余りにも早計であり、また独善的であると言わねばならないだろう。まずはこのような相対的観点を身につけるところから、つぎの論究への準備は始められてゆくことになるに違いない。

〔注〕

- (1) 本年度（昭和63年度）「朝日賞」受賞者
木村資生氏（国立遺伝学研究所教授）の
「分子進化の中立説」参照
- (2) 久保田競「手と脳」（紀伊国屋書店）参照
- (3) このことはあらゆる「精神病」のうち、
「精神分裂病」が最も「人間」に本質的な
病いであることを示唆する。その治癒困難
性は、いよいよもってその本質的性格を示
すものと言えよう。
宮本忠雄「精神分裂病の世界」
（紀伊国屋書店）参照
- (4) アリストテレス「形而上学」980b参照
- (5) ハイデッガー「存在と時間」第1部 第3
章参照
- (6) ヘーゲル「精神現象学」 ラッソナーホフ
マイスター版 347～348頁参照
- (7) ガリレオ・ガリレイ「偽金鑑識官」参照
- (8) 村上陽一郎氏
- (9) 「人間」と他の生物、なかんずく「類人猿」
との間を結ぶ生体系上の連関の欠落